

早稲田大学審査学位論文

博士（スポーツ科学）

概要書

フランスにおける柔道の伝播と受容に関する
歴史学的研究

—1936-1956 年における国内外の
地域間・諸集団間の相互連関に着目して—

The Diffusion of Judo to and within France
from 1936 to 1956:

Interaction between Global, Local, National and Regional
Forces

2019年1月

早稲田大学大学院 スポーツ科学研究科

星野 映

HOSHINO, Utsuru

研究指導教員：リー・トンプソン 教授

スポーツの伝播と受容の歴史はこれまでさまざまに論じられてきており、「ナショナル」な枠組みで論じられる傾向が強かったスポーツの伝播と受容を相対化する試みも盛んである。それに関連して、より広範な視点を持って全体を把握しようとするスポーツ史のグローバル・ヒストリーも盛んになりつつある。こうしてスポーツの伝播と受容のベクトルが複雑化するなかでは、諸層間の接触において生じてきた少なからぬ摩擦や対抗関係が注目される。とりわけフランスにおける柔道は、そうした伝播・受容の過程での摩擦や対立関係を経験しながらフランス社会で人気スポーツとして台頭していく顕著な例であった。

本研究では、新たなスポーツの伝播・受容史として、フランスにおける柔道の伝播とその受容過程を、地域や諸集団間の相互関連に着目しつつ、緊張関係や摩擦が生じ、それが展開していったのかを明らかにしていく。

【第1章】

1930年代のパリに、2つのルートからの柔道／柔術の導入が見られたことを明らかにした。1つはフランスにおける反ユダヤ主義の台頭が、世界的なユダヤ人スポーツコミュニティから反ユダヤ主義に対抗する手段としての柔術をパリのユダヤ人青年にもたらすことにつながり、パリのユダヤ柔術クラブは日本人柔道家・川石酒造之助を指導者として迎えた。ユダヤ人科学者のフェルデンクライスは、フレデリック・ジョリオ＝キュリーを始めとする左派系知識人に柔道を紹介した。1936年6月成立の人民戦線内閣は、余暇政策と相まってスポーツを推進しており、フランス史上初めてスポーツに関する担当ポストを設置した。合理的・科学的なスポーツとしての柔道は、パリの知的エリート層が集まるクラブで指導された。柔道／柔術の、この2つの導入ルートの交差する点にいたのがフェルデンクライスと川石であり、2人は協力してフランス人に適合した柔道の技術体系、指導法を考案していった。それを可能にしたのはユダヤ人であり、従来の説明されたきた日本人による柔道の伝播とは異なる経路でもたらされたものであった。

【第2章】

第二次世界大戦期のフランスにおいて、柔道が1つのスポーツとして公然と姿を現していく過程を追った。占領期前半は、フェルデンクライスが去ったフランス柔術クラブで、川石がメトード・カワイシと呼ばれる手法で柔道実践者を増加させるとともに、「高い月謝を取って柔道指導により生計を立てる」柔道指導システムを構築し、「パリの柔道」を形成した。占領期後半には、柔術クラブのボネ＝モリ会長がフランスレスリング連盟の役員となり、川石と協力しながら、1943年に第1回フランス選手権大会が開催する柔道を1つのスポーツとして確立させた。一方でヴィシーを含む南部でも、ヴィシー政権の警察機構や国立競技者指導員学校などで柔道が導入されるなど、占領下のフランスではさまざまな柔道実践の実態があったことを明らかにした。

【第3章】

戦後になって成立したフランス柔道柔術連盟（FFJJ）による、柔道界の中央集権的な統合をめぐる過程をたどった。地方への拡大、諸制度の整備などを、川石がつくりあげたシステムを支柱にしてフランス柔道界を統合しようとしたFFJJの活動を明らかにした。こうしてFFJJは「パリ柔道」で全国的な統合を図ったのであるが、それは戦時期に南部で行われていた柔道を包摂するなど、単なる「パリから地方へ」という上意下達の柔道普及にとどまらないフランス国内における柔道伝播のありようを明らかにした。

【第4章】

第4章では、まずFFJJによる普及過程における講道館柔道の流入とそれに対するFFJJの対応を明らかにした。次に地方からのFFJJ及び「パリの柔道」に対する批判が起こったことを明らかにした。ここでのFFJJ批判は、「パリ-地方」の地政学的、社会階層的、経済的な関係から生じたものであったが、批判の声を上げた柔道家が「川石式柔道」に対抗して「講道館柔道」を支持したことで、技術的な批判が「パリの柔道」に対する批判の象徴として機能した。FFJJを批判した「講道館派」は全国的に拡大し、講道館アマチュア柔道連盟(UFAJK)を結成するなどして批判は大きく発展していった。その一方でFFJJは、講道館柔道を「異端化」し、講道館派の柔道家を排除する姿勢を見せた。

【第5章】

フランス国内における柔道の拡大と分裂の一方で展開していった国際柔道界及びそこでのFFJJの動きをたどった。FFJJはヨーロッパ柔道連盟や国際柔道連盟で主導的に活動し、国内の「講道館派」との対立の一方で、外交においては親日の面従腹背で国際大会の開催やオリンピック導入への働きかけなどを精力的に行った。FFJJの後押しでIJF会長には日本の嘉納履正が就任し、国際柔道界は日本を中心に据えて講道館柔道をスタンダードとした国際スポーツとして歩を進めていた。しかし、国内で「講道館派」との対立を見せるFFJJにとって、いっぽうでは日本と協同することを選択した国際的な立場との「ねじれ」は、国内の方向性にも影響を与えることになる。

【第6章】

FFJJが「異端」としていたはずの「講道館派」に譲歩し、柔道界統合へ向かう展開を明らかにした。指導者免許法の成立化に伴う指導者組合の発足や、川石への集中的な批判とそれに伴う川石の「聖性」の失墜などといった国内柔道界の動きは、FFJJの国内外の「ねじれ」と相まって、FFJJによる「譲歩」を促し、フランス柔道界の再編を実現させ、FFJDAが成立する。これは旧FFJJと「講道館派」を共存させることで可能となる共和國的な解決策なのであった。

フランスへの柔道の伝播とその受容は、フランス国内のみで、あるいは日本とフランスの二国間関係のみで展開してきたのではなく、より広範囲な同時代的文脈のなかで達成されてきたのである。